

足立史談

第586号

2016年12月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562
(28-308)

もくじ 浮世絵師・歌川国貞(三代豊国)の美人画 1P
青木萬吉作《旅枕》について 2P 掃部新田の草切り由緒 4P

歌川国貞(三代豊国)《新吉原京町老丁目角海老屋内八千代》
天保4年(1833)頃



■はじめに
郷土博物館では、松方三郎コレクション四〇〇点を中心に、約一三〇〇点の浮世絵を収蔵しています。館蔵浮世絵は、江戸時代の足立区の風景を描いた作品をはじめ名所絵(風景画)が多くを占めますが、吉原遊廓の花魁や江戸の町娘などを描いた美人画も決して少なくありません。現在、これらの美人画に描かれた内容の情報整理を継続的に進めています。今回は、当館の美人画の中で最も作品数が多く、近年再評価の気運が高まりつつある浮世絵師・歌川国貞(三代豊国、一七八六—一八六四)の美人画をご紹介します。

浮世絵師・歌川国貞(三代豊国)の美人画 畑江 麻里

■歌川国貞(三代豊国)の出発点は役者絵ではなく美人画だった！

歌川国貞(三代豊国)は、江戸時代後期の浮世絵界を代表する存在の絵師の一人です。浮世絵二大ジャンルの美人画と役者絵を中心に戯作の挿絵や源氏絵なども手掛け、生涯に万を超える膨大な量の作品を制作しました。幼い頃から絵を好み、十代なかばで歌川派隆盛の総師・初代歌川豊国に入門。天保十五年(一八四四)には、師「豊国」の名を襲名しました。

当館が二〇一五年に催した浮世絵展「歌川派と歌舞伎」でもご紹介したように、国貞は役者絵の大御所として第一線で活躍しましたが、彼の画業の変遷を辿ってみると、その出発点は美人画にあります。画業のはじめとなる文化四年(一八〇七)頃から美人画を描き、天保期(一八三〇〜四四)には国貞がその人気を独占し、国貞以前

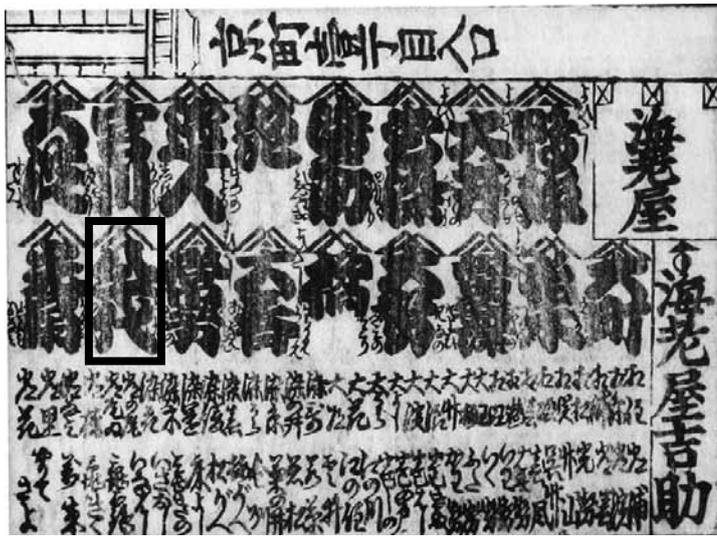
に美人画で人気を得ていた溪斎英泉(けいさい えいせん)の作画量を大きく減らす結果となりました。今回取り上げるのは、この天保期に国貞が描いた美人画のうちの一作です。

■着物の美しさが国貞美人の見所！
国貞画《角海老屋内 八千代》

上の作品は国貞の極印の形状と署名の形より、国貞が天保四年(一八三三)頃に制作したものであると判ります。同様の作品は、ボストン美術館と早稲田大学演劇博物館でも所蔵されています。

桜の木の下、二人の禿(かむろ)を従えて歩いているのは、吉原の花魁です。多くの髪飾りを付け、絢爛豪華な衣装をまとった華やかな姿が捉えられています。その衣装の模様は桜や牡丹、水仙などといった季節の花々があしらわれ、帯には龍や雷雲などの模様が緻密に描き込まれている上、十色以上の豪華な色で表現されています。吉原の花魁たちのファッションは、当時流行の最先端として捉えられ、常に江戸の庶民から注目されていました。

本作で国貞が取り上げたこの花魁は、画面右上に記されたタイトルから、通称「角海老(かどえび)」と呼ばれた妓楼「海老屋」に所属する「八千代」であり、従う禿は「ふみの」と「たより」という名であることが判ります。ボストン美術館所蔵



『吉原細見』(部分)天保 5 年(1834)刊行 (早稲田大学図書館蔵)

の作品では、本作と同様の構図で同じく角海老の「鴨緑(あいなれ)」、「大井(おおい)」が描かれたものと一続きのシリーズとして紹介されており、本作が角海老の主要な花魁を扱った三枚続、あるいは連作であったことが伺えます。その中の一作として描かれた「八千代」は、天保五年(一八三四)春に刊行された吉原の案内書『吉原細見』(早稲田大学図書館蔵)でも大きく記され、角海老中の著名な花魁一七名のうちの一人であったことが判ります。同様に「鴨緑」、「大井」の名もこの中に確認することができます。

- ・〈主要参考文献〉
- ・新藤茂『五渡亭国貞 役者絵の世界』グラフィック社、一九九三年
- ・鈴木重三『歌川国貞の小伝と画歴』『歌川国貞 美人画を中心に』静嘉堂文庫、一九九六年
- ・藤澤紫『浮世絵の美人—メディアアとしての機能』『浮世絵芸術』二〇〇八年
- ・日比谷孟俊『吉原と江戸文化』に関する研究—妓楼和泉屋平左衛門を例として—二〇一五年
- ・日野原健司『歌川国貞 これぞ江戸の粋』東京美術、二〇一六年

国貞が描く美人画は、江戸後期の彫りと摺りの高度な技術が使われているのが特徴です。まさに本作には、前述のような彫り・摺りにおける当時の最高峰の技法が駆使されており、極彩色の着物には目を見張る美しさがあります。

■おわりに

今回は歌川国貞の作品をご紹介しますでしたが、当館所蔵の浮世絵の中には、他にも当時の文化風俗や着物の美しさを楽しめる美人画が多くあります。これらは、当時の色や摺りが良好な状態で保存されています。退色しやすい紫の色も鮮明に残されており、多色摺木版画としての浮世絵の鮮やかさを今に伝えてくれます。今後、これらの美人画を展覧会でご紹介することができるよう、さらなる調査を進めていきます。

（郷土博物館 専門員）

「アラサーみゅーじあむ」 出展資料紹介

青木萬吉作《旅枕》について

小林 優

郷土博物館では、昭和六十一年の開館以来、多くの方々のご協力に支えられて、郷土資料と、地域史にまつわる情報を蓄積してきました。その形は様々ですが、展覧会の開催がそのきっかけになることがあります。今回は、今春開催した「美と知性の宝庫 足立」がきっかけとなつて所蔵者から情報もたらされ、その所在が判明した、花又村(現・花畑地域)の指物師にして和算家、青木萬吉による《旅枕》をご紹介します。

■花畑の指物師・和算家、

青木萬吉

青木萬吉の生まれた花又村は、江戸の和算家、関孝和の創始した関流和算を学んだ金杉清常、太田廣信を中心として、江戸時代中後期から明治にかけて盛んに和算教育が行われた土地でもあります。生家が代々、箆筒や箱といった木工品を制作する指物職を家職としていたことから、指物師を生業としていた萬吉もまた、その中から排出され、江戸時代末期から大正にかけて活動した和算家の一人です。金杉清常の曾孫にあたる金杉

清好の門弟として関流和算を学び、明治八(一八七五)年にはその知識を買われて地租改正の改正委員となつて、土地の丈量を行いました。これによつて和算家としての評判を高めた萬吉のもとには、多くの門人が集まるようになり、やがて和算を教授する寺子屋を運営するに至つたと伝わります。和算の師匠として門



青木萬吉作《旅枕》 明治時代

弟たちに慕われていたと見られ、金杉清常の墓もある花畑の実性寺には、門人たちによって建立された萬吉の墓碑が現存しています。

■指物師としての技量

和算家として一家を為した青木萬吉は、家職の指物業においても一級の腕前を持つ職人であったことが、当時の記録から伺えます。

明治十(一八七七)年、政府の肝煎りによって第一回国勸業博覧会が開催されるや、萬吉は出展者の一人として名を連ねています。この博覧会には、他にも千住など、現足立区地域から多くの職人が作品を出展していますが、開催の同年に内国勸業博覧会事務局より出された『明治十年内国勸業博覧会審査評語』の出品区分二区十四類を見れば、

離合製行厨、駒籠
花又村 青木萬蔵

鉋鑿精巧ニシテ其器善ク實用ニ滴ス 勉勵ノ効アルモノトス

※「萬蔵」は「萬吉」の誤りと思われる。

と、その出品品である行厨(こうちゅう)や、弁当箱のことか)と駒籠(こまべら)着物の捺染用具の一つである木製の薄いへら)に対して、高い評価がなされていたことを確認することが出来ます。第一回国勸業博覧会では、褒賞として龍紋賞牌、鳳凰

賞牌、花紋賞牌の三賞牌が設定され、審査によって授与されましたが、萬吉はこの作によって花紋賞を受賞しており、『旅枕』と共にその褒賞メダルも伝来しています。

■職人の合作《旅枕》

―萬吉と琳派絵師、村越向栄―
この萬吉の技術によって制作されたのが今回ご紹介する《旅枕》です。旅枕とは、江戸時代より長期旅行の際に携帯された細工枕の総称です。単純に箱枕を組み立て式や折り畳み式にしたものなどありますが、その一種として、おおよそ弁当箱大の箱の中に、矢立や発火用具など必要な生活道具が収納出来るよう細工の施されたものがあります。萬吉制作の旅枕もそれと同様のもので、やはり箱形の中に様々な小道具が収納されています。

前頁左下に掲載した画像のように、二段組みになっている上部の段の蓋を開ければそこには算盤が収納されており、その段を外して詰め物を入れれば即席の箱枕になります。さらに、側面を引き上げれば鏡が、その反対の側面を引き抜けば小行灯が収納されている他、楊枝入れや二段の小引き出しといった多様な機能

が一つの箱にまとめられています。実際に使用された痕跡の見られないことから、実用品として以上に一種の工芸品として制作されたものと推測されますが、限られたスペースを効率的に活用して組み上げられたこの《旅枕》は、指物師青木萬吉の高度な技術を物語っています。さらに、その構造と並んで注視すべきなのが、この《旅枕》が江戸琳派の泰斗、鈴木其一の画系を受けつぐ千住の琳派絵師、村越向栄(一八四〇〜一九一四)との共作であるという点です。



村越向栄画
《旅枕》付行灯《四季花鳥図》



「白梅図」中の向栄の印章

《旅枕》の側面に収納された高さ約二〇センチ程の小行灯の四面には、それぞれ白梅、撫子、くつわ虫、墨竹と、春夏秋冬の景物が描かれています。この内の白梅図の左下に、村越向栄の印が捺されており、この行灯の絵が、向栄によって描かれたものであることが示されています。白梅の図には、琳派の絵師がよく用いる墨や顔料のにじみの効果を利用する「たらし込み」の表現技法が使

われている他、細密な描写によるくつわ虫から、一転して水墨一色による墨竹図というように、小品ながら向栄の画力が存分に発揮されています。

この共作がなされた経緯は現段階では明らかにはなっていませんが、絵師と指物師という職人同士のつながり、あるいは萬吉と同じく、向栄もまた千住河原町で寺子屋「東耕堂」(後の村越小学校)を経営していたことから、寺子屋の師匠同士の付き合いを通して、向栄に共作の依頼がなされた可能性が推測されます。また、『開学明細書 明治六年一月

第六卷 第六番中学校』(東京都、昭和三十八年)中を見れば、「萬延元庚申正月ヨリ元治元甲子年五月迄都合五ヶ年間青木敬藏二從学」と、向栄が万延元(一八六〇)年からの五年間を、花又村の和算家、青木敬藏の私塾で学んでいたことが記述さ

れていることから、花又村での和算の学習が、何らかの縁となった可能性も考えられます。

こういった経緯も含めて、この《旅枕》に関する検証は今後も継続して行っていく必要があります。本作は、江戸から明治の指物工芸の高い技術を物語る優品であると共に、向業の画業の幅、そして当時の区内地域で活動していた職人たちの交友の形をも物語る、貴重資料でもあるのです。

（郷土博物館学芸員）

千住掃部宿の「旧書留」から①

掃部新田の草切り由緒

多田 文夫

いまの千住仲町を中心とした千住南部一帯は、江戸時代には千住宿を構成する千住掃部宿だったところである。近世初期は掃部新田という江戸東郊の開発地であり、その名前は開発人であった石出掃部介吉胤にちなむ。吉胤の後裔は町役人もつとめた石出家（千住仲町）で同家が伝えた古文書がある（石出家文書、当館蔵）。いくつかの記録類があるが、その一つに寛政年間（一七八九～一八〇一年頃）に、石出弥五右衛門（生没年未詳）が記述した「旧記留」がある。小横帳に掃部宿の由緒や古文書の写しを採録する、石出家にま

つわる記述も多く、記述に統一性を欠くことから、弥五右衛門の手元での覚と考えられる。

これまで千住宿の成立経過や歴史事項については永野家文書の「旧考録」が歴史著述で大きな位置を占める（当館蔵、足立風土記資料古文書史料集2『永野家文書二』を参照）。同書に見出せない記述や、古文書の採録もあり、本資料を合わせ見ると、より立体的な歴史像を結ぶことが可能となる。本資料の釈文を掲載し、合わせて解題を付して今後の参考に供したい。

※以下釈文のうち○□内は筆者。

■釈文

「(表紙)

旧書留

(1丁表)

【①掃部新田開発】

一、掃部新田開発

慶長三戌年石出掃部開発

元和式辰年九月、石出掃部所持之

地面式拾七町歩余、左之廿人江無

金二而遣シ百姓二取立、伊奈備前

守様江書上ル、

治左衛門 藤右衛門 源次郎

喜左衛門 惣左衛門 長右衛門

門治郎右衛門 新左衛門 徳

左衛門 甚兵衛 与惣右衛門

源右衛門 十右衛門 孫右衛門

門 甚右衛門 甚左衛門 六右衛門 新右衛門 九右衛門 三藏

【②橋戸の由緒】

橋戸始、寛永十七辰年二代掃部所持之地面左之獵師共八人江無金二而遣シ、百姓二取立、同年四月伊奈半十郎様江書上ル、

(1丁裏)

嘉右衛門 忠左衛門 彦右衛門

七郎左衛門 九兵衛 紋四郎

助右衛門 清兵衛

【③河原の由緒】

川原始、承応三年水入畑壺町四反九畝廿九歩之内、壺反八歩之所二家建、

石出 掃部

阿出川平左衛門

地守 三右衛門

右三右衛門願候ニも掃部新田水入畑ト書上ケ候、川原ト唱候儀ハいつとなく申来り候、 (以下次号)

■解題1 掃部新田の草切り由緒

「旧書留」では、冒頭に掃部新田の開発と橋戸（千住橋戸町）と河原（資料上は「川原」と記述。千住河原町）の創立記事がある。

①掃部新田 千住掃部宿の母体となった掃部新田の成立記事で、慶長

三（一五九八）年に石出掃部が開発に入り、元和二（一六一六）年に治左衛門以下、二七町歩の土地に二〇人の草切り百姓が開発したとする。

②橋戸の由緒 橋戸町は寛永十七（二六四〇）年、二代目の石出掃部のころ、嘉右衛門をはじめとする八人の獵師が草切り百姓となったと記している。獵師を百姓に取り立てたという由緒は他書では確認できない。

③河原の由緒 河原町は、承応三（二六五四）年に「水入」（御入のこと）土地台帳に加筆の意）となつたのが畑一町四反余、さらに一反八歩余の家があったという。

■解題2 開発人家の意識

記述内容には石出家が開発の中心であったことを強く意識していた部分がある。掃部新田、橋戸、河原のいずれの開発記述で繰り返されている次の文脈である。元もと「石出掃部所持之地面」であり、それを「無金」で、草切り百姓に「遣し」たとする。

しかし一般的にこの地域で、近世初期の入植は、無主地（所有者のいない土地）に対して行われており、石出掃部のような開発人は、その調整・支援を行っていたので「無金」で土地を「遣し」たとの記述は、あくまで後世の本資料が作成された十九世紀初め頃の感覚であろう。

（郷土博物館学芸員）